
「これからの在宅医療に対する新たなアプローチ」の 発刊にあたって

東京都医師会 会長
鈴木 聡 男



少子高齢社会となり、回復しきれない疾病や生活機能障害を被って、「暮らしの場」で療養生活をおくる都民が増加しています。その一人ひとりを支えるために、多様な社会基盤の整備が求められています。自立支援を根幹とした介護保険制度の定着と、時代にあった新たな「在宅医療」の提供はその重要な要素です。

これまでも東京都医師会では、地域福祉委員会などにおいて、その具現化に必要な理念や医師機能を体系的に検討し、既刊の“かかりつけ医機能ハンドブック”や“在宅医療実践ガイドブック”などで提言するとともに、東京都との連携により、さまざまな研修や取組みを行ってきました。本書ではその過程での経験や知見から得た「在宅医療」の今日的課題を整理し、新たな発想やアプローチからさまざまな提言を行っています。

今日、在宅「医療」「療養」「ケア」という言葉が混在して使われていますが、東京都医師会では、自ら場所や方針の決定に参加し、“個の尊厳”と“生活の質”を保ちながら、疾病や生活機能障害と向き



あい改善を目指す、その人の視点からみた“主体的な療養生活”を「在宅療養」、その同じ事象を医療・介護・福祉提供者の側から見たときに「在宅ケア」と表現しています。その意味で「在宅医療」は、「在宅療養」を“患者立脚型 QOL”によって支える「在宅ケア」の重要な要素と位置付けられます。

私たち医療提供者は「在宅医療」を、療養者の意思・状態・家族・住まい方などさまざまな要素を踏まえて、いつでも・どこでも・だれにでも組み上げることのできる今日的医療提供スタイルとして磨き挙げ、急性期や慢性期の医療機関、介護や福祉施設、多様な居宅サービス事業者や職種との連携による、「地域ケア」の中で培っていく必要があると考えます。本書が、これからの都民の在宅療養とケアの質の向上に資することを願っております。

2011 (平成 23) 年 3 月